

「マンガみたい」なままではいけない

——宇佐見りんの今後

図書館係 阿部健治

宇佐見りんは1作目の『かか』で「文藝賞」と「三島由紀夫賞」を、2作目の『推し、燃ゆ』で「芥川龍之介賞」を受賞した。芥川賞を受賞した時は21歳で、これは、16年前の2004年（平成16年）に19歳で第130回芥川龍之介賞を受けた綿矢りさ（受賞作『蹴りたい背中』）と、綿矢と同時受賞で当時20歳の金原ひとみ（受賞作『蛇にピアス』）に次ぐ年少記録である。

世間というのは、常に「記録更新」とか「無敗（宇佐見は2作発表で3つの文学賞を受賞）」といった神話を待望しているものだ。「マンガ」は特によくそれを伝えてくれるものだが、面白いことにそういうマンガが世に出ると、それを追いかけるようにそっくりの現実の存在が現れるのだ。その最も顕著な例は、浦沢直樹の出世作『YAWARA!』（1986～1993雑誌連載）と谷（旧姓田村）亮子（1992に高校2年生でバルセロナオリンピック銀メダル、以下オリンピックに5大会連続出場し、金メダル2個、銀メダル2個、銅メダル1個を獲得）の関係だろう。田村はマンガにちなんで「やわらちゃん」と呼ばれたが、本名よりその名の方が自然なほど「YAWARA」そのもののような感じだった。

また、もともとはライトノベルでコミック化、アニメ化もされた『りゅうおうのおしごと』（2015～現在進行中）は将棋の世界を扱ったものだが、執筆開始当時、10代で将棋界最高のタイトル「竜王」を獲得するという設定は「ありえない」と批判されることが多かったという。第1巻が出た当時、藤井聡太は奨励会（プロ棋士の下部組織）の二段だったが、翌年、史上最年少の14歳2カ月で中学生棋士（四段昇段＝プロ入り）になると、いきなり無傷で29連勝し、昨年には18歳で「棋聖」「王位」の2冠を獲得するに至った。『りゅうおうのおしごと』の原作者白鳥士郎も「自分の主人公も最初は連敗して苦しみという設定で、デビューから土つかずという記録は想像を超えており、フィクションでもそこまでは書けなかった」と述べている。フィクションのリアリティがそれに続く「現実」によって補われるというのは驚きだが、「事実は小説より奇なり」というように、時としてそういうことも起こるのである。

こういうことを書いたのは、宇佐見りんにも同様の現象が指摘できそうだったからである。『響～小説家になる方法～』（2014～2019連載完結）というマンガで出た。作者は柳本光晴という人で、2017には「マンガ大賞」を受賞。コミックスの累計発行部数は233万部以上、2018には元樺坂46の平手友梨奈主演『響-HIBIKI-』のタイトルで実写映画化もされている。この中で、平手演じる主人公「鮎喰響（あくいひびき）」は高校生ながら投稿した処女作が芥川、直木両賞の候補になり、二つを同時受賞するのである（対象作品の定義が異なる両賞の同時受賞は、実際にはありえないと思うが…）。

宇佐見は21歳の大学2年生で、上記のように「史上3番目の若さ」ということだが、綿矢・金原の作品は16年も前なので、やはりインパクトは大きかった。しかも、2作で3賞を受賞（「文藝賞」は「応募」だが、「三島賞」は主催出版社がその期間に出版されたものの中から選んで候補とするものだから同時受賞が可能なのだ。）し、ハズレなしというのはすごい。また、純文学なのに「推しにのめり込む主人公」という「今日（サブカル隆盛の）的」テーマを描いて世間へ

のアピール度は満点であり、まさに「**リアルひびき（響）**」（谷亮子が「リアルやわら」であるのと同じくらいに）とでも呼びたいほどの圧倒的な存在感である。

こうして注目されるに従って、彼女の周辺もかなり報道されるようになった。宇佐見は中高一貫校に在籍して、現代文では梶井基次郎の『檸檬』を一年かけて読むような（特別な）授業を受け、その先生に大きな影響を受けたと言う。そして具体名は秘しているようだが、今はかなり有名な大学に在籍しているそう。絵に描いたような成功物語である（マスコミはそうに扱っている）。まずはこれを「**マンガみたい**」な**成功**と呼んでおこう。俗な受け取りではあるがわくわくするのは事実。これも彼女の魅力の一環である。

「マンガみたい」な成功は、他の分野の人間ならまだ危険度は少ない。例えば、将棋の藤井聡太は、ただひたすら将棋が強くなることに打ち込めばいい。あと少しだから高校は卒業した方がいい、などと言われても、今は将棋に打ち込む時間が何より貴重だという**自分の感触**を信じ貫けばいい（コロナ禍の臨時休校以降の、彼の将棋の「伸び」は凄まじかった。ここで「時間の貴重さ」を実感したのだろう）。打ち込む対象がはっきりしていれば迷いは少ない。しかし、「文学」になると、ことはそう簡単にはいくまい、と筆者は思っている。

小説は作家の「生」の全体から生まれてくるものだ。特に純文学（「三島賞」や「芥川賞」はこれが対象の賞だ）はそう。良くも悪くも「自分」を切り売りするのが純文学なのだ（エンタメ小説にだって、作家の「生」は反映するだろうが、こちらはある程度切り離して作品を書き続けていくことも可能のように思われる）。だから、「平穏すぎる生活」や「チャホヤされすぎる状況」からは、読者の心を強く揺さぶるような「やむにやまれない（書かずにはいけない）もの」は出て来にくいと考えられるのである。

宇佐見は、中上健次が好きだと各所で語っている。中上は1975（昭和50）に『岬』で芥川賞を受賞した作家で、紀州熊野（あの世の入り口と言われる場所）の風土と宿命とも言える複雑な家庭事情（私生児として生まれ、異父兄妹がたくさんいて、母の再婚相手及びその連れ子と一緒に暮らす、というような）から生まれた、土と血の匂いがする文学を一貫してかいたという人である（代表作『枯木灘』は日本文学の到達点の一つという評価もある）。実際、宇佐見の処女作『かか』には彼の影響が顕著である。主人公「うー（うさぎ）ちゃん」は母に強く依存（文字通り「一体」の母子関係）しながら、同時にどうしようもない違和感にもさいなまれ（これは子を産む「女」という性そのものへの違和感にもなる）、手術を控えた母を残して、一人で熊野に旅立ったりするのである。

すぐれた文学にはすべて中上のように過酷な経験が必要だとは言わないが、自分を捨てた実父へのうらみや、それを源とする自分の「血」への嫌悪感などは経験した者でなくてはわかるまい。そういう意味で、筆者は宇佐見の「マンガみたい」な成功に危惧を感じるのだ。『推し 燃ゆ』の主人公「あかり」は高校もやめ、バイト先もやめ、唯一の心の拠り所だった「推し」も失う。もちろん、宇佐見の現実の「生」の中にもこういう影の部分はあろうが、あまりにもギャップが大きすぎるのではないかと、どうしても感じてしまうのだ。

宇佐見は受賞のインタビューで、「まだ、芥川賞をもらう予定ではなかった」という趣旨のことを言い、周囲を驚かせたが、これは『推し 燃ゆ』という作品の欠点はよくわかっているの、執筆中の第3作でより良いものを書き、これで勝負したいという意味だったらしい。そういう話を聞くと、「マスコミの寵児」にまつりあげられても、それでペースを乱すようなことはなさそうだが、それにしても若くしてこれだけの達成をすると、ハードルはますます高くなる。宇佐見には、「書き言葉には誠実でありたい」という「受賞のことば」を最後まで裏切ることなく進んでほしいと願うばかりだが、これは相当に困難な茨の道である。